

第3回 国史たちの対話 趣旨説明

三谷 博

渥美財団の「国史たちの対話」が第3回を迎えることになりました。私たちフォーラムの世話人は、アジア未来フォーラムにこの企画を採用してくださった渥美財団、および暖かいご支援を賜ったソウル大学日本研究所、早稲田大学東アジア国際関係研究所、および東京俱楽部に深く感謝いたします。

さて、このフォーラムの第1回は日本の北九州市で行われ、東アジアの韓国・中国・日本が歴史をめぐって対話するとき、それぞれどんな癖があり、問題を抱えているか、とくに自己国史を思い描くとき、隣国との関係をどう位置づけているかを検討し、今後の対話を可能にするために何が必要かを考えました。第2回以降は、歴史認識を扱う場合に必要な東アジア史上の諸事件、中でも関係国の間に生じた大規模な衝突を取り上げることとしました。今後の東アジアに平和と安定をもたらすには、過去に生じた逆の事態を検討し、比較考察することが必要と判断したためです。昨年、同じく北九州で開かれた第2回に取り上げたのは、「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」でした。韓国・中国・日本だけでなく、モンゴル共和国と中国の内モンゴルからも研究者を招き、人類史上の大事件であったモンゴルのユーラシア席巻が東アジアに何をもたらしたのかを検討しました。そこでは、元朝をモンゴル帝国史の一部と扱うべきか、それとも中国史の一部と位置づけるべきかという点をめぐつて議論が発生し、「国史」ですら決して一国史の枠の中では扱いきれないことが鮮明になりました。また、モンゴルの征服に伴って大規模な文化混交も生じ、朝鮮・中国の社会に無視できない影響を遺したことも明らかとなりました。

さて、ここ第3回のソウルでは、「17世紀東アジアの国際関係—戦乱から安定へ」というテーマを取り上げます。16世紀末、日本の豊臣秀吉が二度にわたって朝鮮に侵攻し、朝鮮・明朝の連合軍によって撃退された後、今度は満洲族のホンタイジがまた2度、朝鮮に攻め込んでこれと宗属関係を結び、さらに中国本部にも侵攻して清朝を樹立しました。これは、7世紀に朝鮮半島をめぐって生じた東アジア大乱、日本と新羅・唐連合軍の戦いと朝鮮半島の統一、および13世紀のモンゴル襲来に次ぐ、第3の東アジア大乱です。

韓国ではこの大乱を倭乱と胡乱と呼んでいます。今まで各国の研究者は両者を別々に論じてきたようですが、倭乱と胡乱を同時に捉えたら何が見えてくるのか。これが今回の第1の問題です。当時の東アジアでは、中国が世界から大量の銀を吸収していました。明朝はまずはメキシコ、ついで朝鮮から製錬技術で銀を大量生産するようになっていた日本から銀を大量に買い込み、それを長城の建設に注ぎ込みました。これは域内各国の経済関係を緊密にし、各国に繁栄をもたらしましたが、その一方では日本や満洲族の中に軍事霸権の追求という野望を生んだのです。経済の繁栄と大戦争の同時進行、これが17世紀の東アジアでした。

このフォーラムでは、この東アジア大乱について、従来の研究をもとに倭乱と胡乱が朝鮮社会に与えた打撃と傷跡を確認する一方、この深刻な大乱がいかにして終息に導かれたのか、また関係国の社会にどのような影響を遺したのかを明らかにします。

プログラムから予想されるように、各国の研究者の中には、これらの問題への関心にかなりのばらつきがあるようです。また、韓国では国史にこの国際問題を組み込まざるをえませんが、中国や日本では必ずしもそうではありません。これら関心の異なる歴史家の間にどう対話を成立させるか、また新たな問題に気づいていただくかが、このフォーラムの課題です。

「国史たちの対話」は、参加者の中に歴史認識の一致を作り出そうとするものではあります。各国で教えられている公定の歴史は無論のこと、個々人の歴史像の間には、注目点もその解釈も大きな相違と対立を含んでいると予想します。ただ、このフォーラムはとかく対立ばかりが注目される「国史たち」の間に対話を可能とするために設立されました。そこで、発表の方々には、自身の発表とそれをめぐる討論に意を注ぐだけでなく、他の発表に耳を傾け、そこから新たな知見、さらに学友も見つけていただければと存じます。また、今回は発表者以外にも「国史」専門家をお招きしましたが、その方々には、どうか、各セッションの質疑時間に積極的に発言し、さらにコーヒーブレイクや食事の時間を利用して、関心共有でできる新たな友を見つける努力をしてください。無論、三ヶ国の研究者の集会なので、言語上の障害が多々あるかと存じます。その点は、渥美財団のメンバーなどがお助けしますので、遠慮なくお申し付けください。

第3回「国史たちの対話」が、国境を越えた歴史対話を可能とし、東アジアに知のケミストリーを生み出す機会となるよう、参加の方々の積極的なご協力をお願い申し上げます。